

## グローバル化と文化多様性

佐々木 雅幸（大阪市立大学教授）

先月末から、第2回国際都市創造性学会を成功させ、第3回大会を日本に招致するミッションをもって朝晩はまだ肌寒いロンドンに出かけていた。

幸い、主催者であるロンドン大学キングズカレッジ校のアンディ・プラット教授の創造的なマネジメントが功を奏して、学界の第一線の有名教授から、若手の研究者まで約100名が集い、そのうち50名ほどが研究報告をするという盛況のうちに幕を閉じ、第3回を大阪で開催することが決まった。

そこでの中心的な話題は「創造都市と創造産業」に関するものであった。創造都市とは長引く不況や産業空洞化に悩む世界の都市が新たな創造的文化産業を育成し、雇用や都市問題を解決しようとする斬新な都市ビジョンである。

とりわけ、グローバル化のもとで映画やテレビ番組などの分野でハリウッドの一人勝ち現象が強まれば、文化の画一化の傾向が増大し、先進国といえど文化的多様性を消失する危機が迫っているとして、国連教育科学文化機関（UNESCO）が、個性的な文化産業を振興することによって都市再生と文化的多様性を高める意図で、2004年に創造都市のグローバルネットワークを呼びかけて以来、注目度が一気に上がった。

件のロンドンでの学会に特別参加したUNESCOの文化局長、フランチェスコ・バンダリン氏は最近、富士山の指定で関心が高まっている世界遺産と創造都市とをカルチャーツーリズムでネットワークしているという構想まで提示した。

UNESCO創造都市ネットワークには、モントリオール、ボローニャ、エジンバラ、メルボルン、プエノスアイレス、アスワンなど世界で34都市、このうち日本では神戸、名古屋、金沢の3都市、韓国がソウルなど3都市、中国は北京、上海など5都市にのぼり、さらに40を超える都市が登録申し込みを準備している。

ロンドンでの会議には欧米の先進国の研究者ばかりでなく、南米や中東、アフリカ、東南アジアから参加した若手の研究者が意欲的な発表を行い、多様な都市再生プログラムが紹介されたのである。

このように、20世紀末には主として、金融経済の分野で画一化を基調としたグローバル化が進んだが、21世紀にはいると、画一化に抗して、多様性を目標に文化のグローバル化が進む新たな段階を迎えている。

しかしながら、文化多様性にもとづくグローバル化は、相互理解に基づかず過度に独自文化を主張するとナショナリズムを助長する傾向も生まれる。近年の東アジアでは、領土問題や歴史認識を巡って、国と国の間でナショナリズムが強調される雰囲気醸成されているのも事実である。

だからこそ、都市と都市が互いの文化を尊重し、多様性をはぐくむネットワークを構築する必要が高まっている。それゆえ、日中韓3国の創造都市が2014年から取り組む「東アジア文化都市事業」を、来年7月に大阪で開催する第3回国際都市創造性学会の中心テーマに据えようと考えているところである。